

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

西暦二千年紀人類の価値観に関する統計地理学・言語学的研究：世界価値観調査WVSを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-12-11 キーワード (Ja): 西暦二千年紀, 価値観, 統計地理学, 世界価値観調査, 言語学 キーワード (En): The Second Millennium, Human Values, Statistical Geography, World Values Survey, Linguistics 作成者: 川西, 孝男 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000393">https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000393</a>

# 西暦二千年紀人類の価値観に関する統計地理学・言語学的研究 —世界価値観調査WVSを中心に—

## A Study of Statistical Geography and Linguistics about Human Values in the Second Millennium : Focusing on the World Values Survey (WVS)

川西 孝男 (王立地理学会・フェロー)  
KAWANISHI Takao (Fellow of Royal Geographical Society, F.R.G.S.)

キーワード：西暦二千年紀、価値観、統計地理学、世界価値観調査、言語学

Keywords: The Second Millennium, Human Values, Statistical Geography, World Values Survey, Linguistics

### I はじめに—現代の価値観への学術的アプローチ—

西暦二千年紀前後いわゆる第二ミレニアム期に人類は様々な事象を経験あるいは共有してきた。二千年紀前には旧ソ連崩壊と東西冷戦構造の終結、欧州連合の始動そして二千年問題などを乗り越え、以後においては米国主導の国際秩序から中国・ロシアの復興と躍進、イスラム・ヒンズー勢力の拡大、アラブの春、アフリカ開発への展開など多様化が進むかと思われたが、世界規模の感染症による混乱など不安定要素も多い。一方、日本においてもこれら世界情勢の影響の中、二千年紀前には阪神淡路大震災や長期デフレなどによる社会経済的混乱と停滞、以後にも東日本大震災や原発事故そして想定される南海トラフ地震など様々な対応に迫られている。

このような世紀の転換点において人類の価値観への学術的かつグローバルな統計収集は、1980年代に始められた世界価値観調査WVSが知られる。20世紀後半に政治的中立の立場でのWVSの調査は当初、日米を含む10か国で行われ、2020年までに延べ100か国以上を調査し、この7期間、1期当たり平均数十か国を調査、その総人口は世界の10～50パーセント以上を占めるものであり、コンピュータ・インターネット普及初期のグローバル学術調査のさきがけとしても知られる。

本論では、このデータを用いて二千年紀前後の人類の価値観そしてその動態を俯瞰し、二十一世紀の世界がどのような方向に向かうのかを統計地理学を用いて考察しつつ、この地理的分布そして日本と世界の価値観に関する分析に、言語学あるいは国語学的手法を用いて新たな視点を開きたい。



Welcome to the World Values Survey site

図1 WVS homepage 抜粋 (World Values Survey Association, Wein, <https://www.worldvaluessurvey.org/WVSContents.jsp>)

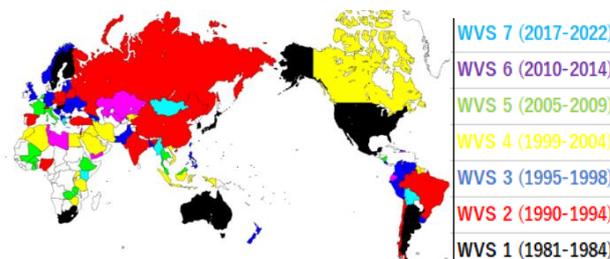


図2 WVSによる7回の新規調査国分布(下記WVS参考文献を元に筆者作成)



図3 WVSサンプル集計推移 (筆者作成)

### II 「西暦」の概念と「ミレニアム」(千年紀)

世界暦Common Eraは今日、キリスト誕生を紀元とする西暦Before Christ (BC)をグローバル・スタンダードとして取り入れ、宗教暦や元号などと併用することが多い。これは19世紀以降の科学技術及び20世紀の世界システムの基準となった欧米のキリスト教文化圏の影響による。

さらにキリスト教文化がアジアやアフリカに波及するにつれ、キリスト教的世界観とともに千年という歴史的区切りの中でミレニアムの意識が生まれ、千年王国到来に伴う終末思想や、急速に普及したコンピュータの動作不具合に起因する安全保障上の二千年問題が浮上するなど、そこに様々な思惑が絡みながら二千年紀を迎えたとと言える。

一方、この二千年紀前後すなわち1980年代から2020年にかけての特徴として、世界人口の拡大とスーパーコンピュータに代表される情報通信機器類の著しい進歩が挙げられよう。

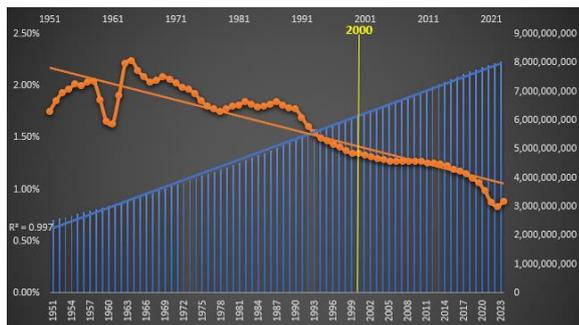


図4 二千年紀前後の世界人口・増加率<https://www.worldometers.info/world-population/world-population-by-year>に掲載されたUN人口統計を元に筆者作成

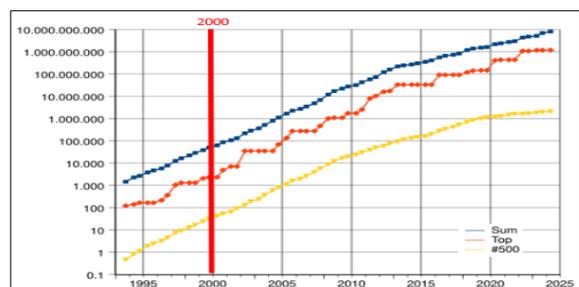


図5 スーパーコンピュータ (SC) 演算速度の推移[https://en.wikipedia.org/wiki/History\\_of\\_supercomputing](https://en.wikipedia.org/wiki/History_of_supercomputing)を元に筆者加筆。上線: SCトップ500台の合計性能、中線: 最速のSC、下線: 500位のSC (演算単位:GFLOPS)

### III 二千年紀の「幸福感」の推移

では、二千年紀における世界の価値観の変化は統計学的にどのようにみられたかについて前述のWVS価値観調査のメインテーマの一である幸福感について考察する。

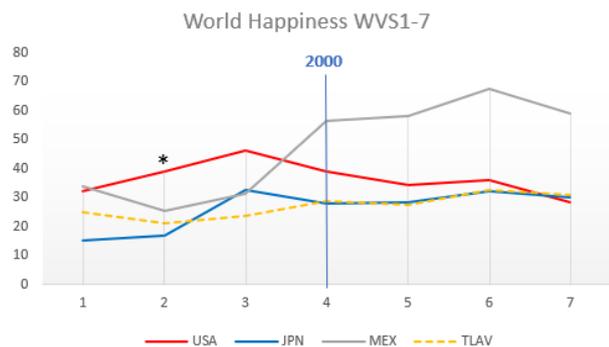


図6 WVS Questionnaire :Feeling of happinessを元に筆者作成(※WVS2,USAデータ無のため前後平均値で補正)

### IV 二千年紀と宗教そして言語・国語学的な比較考察

一方で、このような二千年紀における価値観は世界の宗教あるいは言語圏でどのようなデータを示すのであろうか。以下は世界のキリスト教国、イスラム教国、仏教国そして漢字文化圏の中国、日本などをグラフ化、可視化したものである。

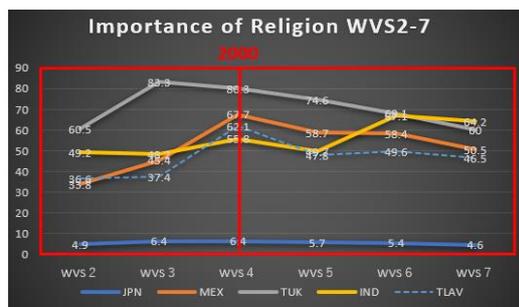


図7 二千年紀前後の信仰意識(WVSデータを元に筆者作成)

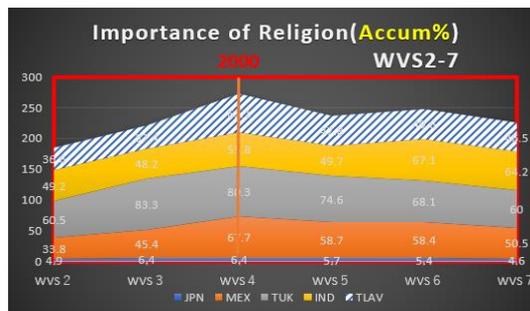


図8 二千年紀の信仰意識(%積算:含全体平均、筆者作成)

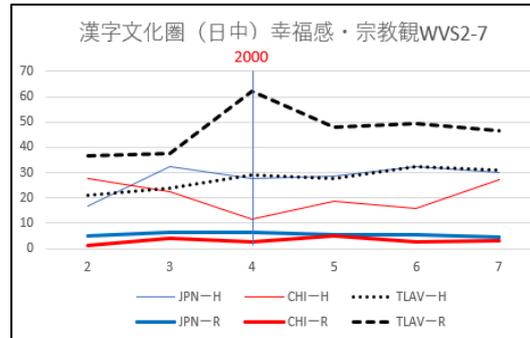


図9 漢字言語文化圏における価値観 (細線:幸福度、太線:宗教重要度、破線は全体平均値、筆者作成)

### V おわりに (仮説呈示)

結論に関しては本発表で述べ、ここでは主な仮説三点を呈示する。すなわち、①上述の世界情勢の変動によって価値観もグローバルに連動変化する②人類の価値観は二千年紀といった長期、周期的な変動要因が大きい③二千年紀前後の価値観に大きな変化は見られず、地域による独自の価値観あるいは人類に共通の価値観を保持し続けていた、などである。

#### (主要使用データ・資料および謝辞)

Haerper, C., Inglehart, R., Moreno, A., Welzel, C., Kizilova, K., Diez-Medrano J., M. Lagos, P. Norris, E. Ponarin & B. Puranen (eds.). 2022. World Values Survey: Round Seven – Country-Pooled Datafile Version 6.0. Madrid, Spain & Vienna, Austria: JD Systems Institute & WWSA Secretariat. WV1\_Results World Values Survey 1 (1981-1984), [https://www.worldvaluesurvey.org/WVS\\_DocumentationWV1.jsp](https://www.worldvaluesurvey.org/WVS_DocumentationWV1.jsp)ほかWV2-7Resultsを参照。

本研究の二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「世界価値観調査 Wave1-7, 1981-2021」(電通総研、山崎氏)の個票データの提供、そして共同研究チームの助言・協力を受けた。また、言語地理・国語学そして中国・東アジア地域史において、国立国語研究所および京都大学人文科学研究所での研究成果や文献資料を活用した。本論における参考文献として追加資料などはリポジトリ上で公開する。

川西孝男

補足説明・資料

1) 本論における「二千年紀」に関して、1001年から2000年を指し、現在は三千年紀(2001~3000年)であると言われるが、本論では西暦2000年前後の考察であり、二千年紀もしくは西暦二千年の標記を用いた。ミレニアムに関しても同様とし、西暦2000年前後について「第2ミレニアム期」とした。

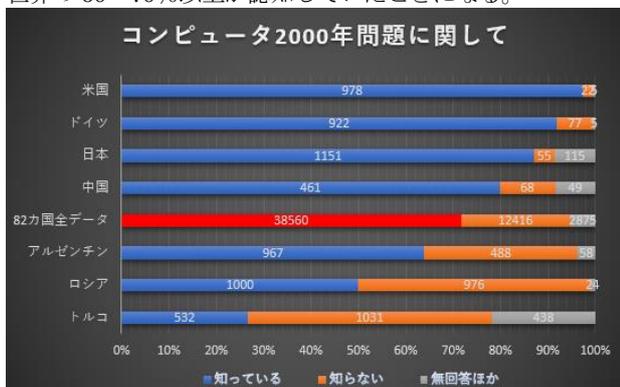
2) 幸福度(幸福感)Happinessに関してWVSの質問票は次のものであり、本論で用いた「幸福(度)」とは、中間部の「まあ(概して)幸福である」などのあいまい性を排除し、データを厳密にして統計・可視化するため「1 Very happy (たいへん幸福である)」を用いた。

Question 128

Taking all things together, would you say you are:  
(Read out in reverse order for alternate contacts)

- 1 Very happy
- 2 Quite happy
- 3 Not very happy
- 4 Not at all happy
- V Don't know

3) 本論で述べた「コンピュータ2000年問題」の当時の世界の認知度は次のようなものであり、この統計によると全世界の60~70%以上が認知していたことになる。

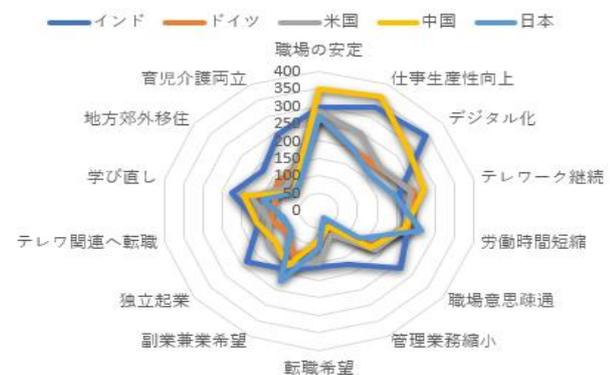


各国のコンピュータ2000年問題の認知度：筆者作成

データ出所：東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJ データアーカイブから「ギャラップインターナショナルミレニアム記念調査、1999」(日本リサーチセンター)の個票データの提供を受け、この一部を使用しグラフ化した。

4) 昨今のコロナ禍において世界の意識変化はどのようなものだろうか。職場を中心に調査が行われたが、社会不安のため現在の職場の改善と感染症対策に焦点が置かれる傾向にあり、転職、コロナ需要への起業といった動きは世界的に控えられたことが窺える。一方、インド、中国といった21世紀に成長を続ける巨大国家において生産性向上とデジタル化が継続されたことも注目される。

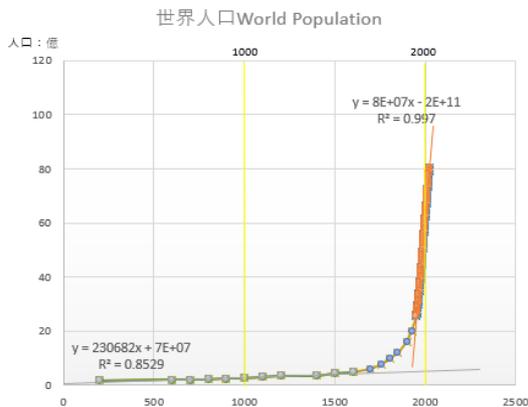
コロナ禍での職場意識変化



コロナ禍での主要国における職場意識変化：筆者作成

データ出所：上記研究センターSSJ データアーカイブから「『グローバル就業実態・成長意識調査(18ヶ国・地域データ), 2022』(パーソル総合研究所)の個票データの提供を受け、この一部を使用しグラフ化した。

5) 過去二千年の世界人口推移  
推計ではあるがキリスト生誕当時の世界人口は約1億人、西暦千年時には3億人前後、19世紀以降人口が急上昇し、二千年時には60億を超えたとみられる。



西暦ゼロ年以降の世界人口の推移  
Worldometer <https://www.worldometers.info/world-population/world-population-by-year/>を元に筆者作成

6) 漢字文化圏と「語族」

従来のアジア圏の言語(文化)圏について語族 Language family という指標が用いられたが、それによると東アジア地域は次のような様々な語族に分化することになる。しかしながら、漢字による文字認識や言語学習がなされる漢字文化圏では、方言による発音の差異はあれど、漢字の使用によって共通の意思疎通や認識さらには共感や文化を持つことが容易となる。

漢字文化圏	語族による分類
中国	シナ・チベット語族
日本	日琉語族/アイヌ語族
台湾	オーストロネシア語族(台湾諸語)
シンガポール	不明：マレー語(国語) 4公用語
韓国	朝鮮語族
北朝鮮	朝鮮語族
ベトナム	オーストロアジア語族(ベト・ムオン語派)
マレーシア	オーストロネシア語族(マレー・ポリネシア語派)

漢字文化圏構成国と語族との比較：筆者作成

折口信夫「日琉語族論」、『民族学研究 15(2)』、日本民族学会、1950年11月などを元に筆者作成。

主要参考文献など

- 電通総研、池田謙一「日本人の考え方 世界の人の考え方 II: 第7回世界価値観調査から見えるもの」、勁草書房、2022
- ロナルド・イングルハート著、山崎聖子訳「宗教の凋落?: 100か国・40年間の世界価値観調査から」、勁草書房、2021
- OECD編、西村美由起訳「OECD 幸福度白書5——より良い暮らし指標:生活向上と社会進歩の国際比較」、明石書店、2021
- 猪口孝「アジア・バロメーター東アジアと東南アジアの価値観: アジア世論調査(2006・2007)の分析と資料(アジアを社会科学するシリーズ4)」、慈学社出版、2011
- 東京大学社会科学研究所編「20世紀システム 1-6」、東京大学出版会、1998-99
- J.P. クレベール著、杉崎 泰一郎、北村直昭訳「ミレニアムの歴史: ヨーロッパにおける終末のイメージ」、新評論、2000
- 鈴木修次「日本漢語と中国: 漢字文化圏の近代化」、中央公論新社、1981
- Yang Zhong & Ronald F Inglehart, *China as Number One?: The Emerging Values of a Rising Power (China Understandings Today)*, University of Michigan Press, 2024

※無断転載を禁じます。